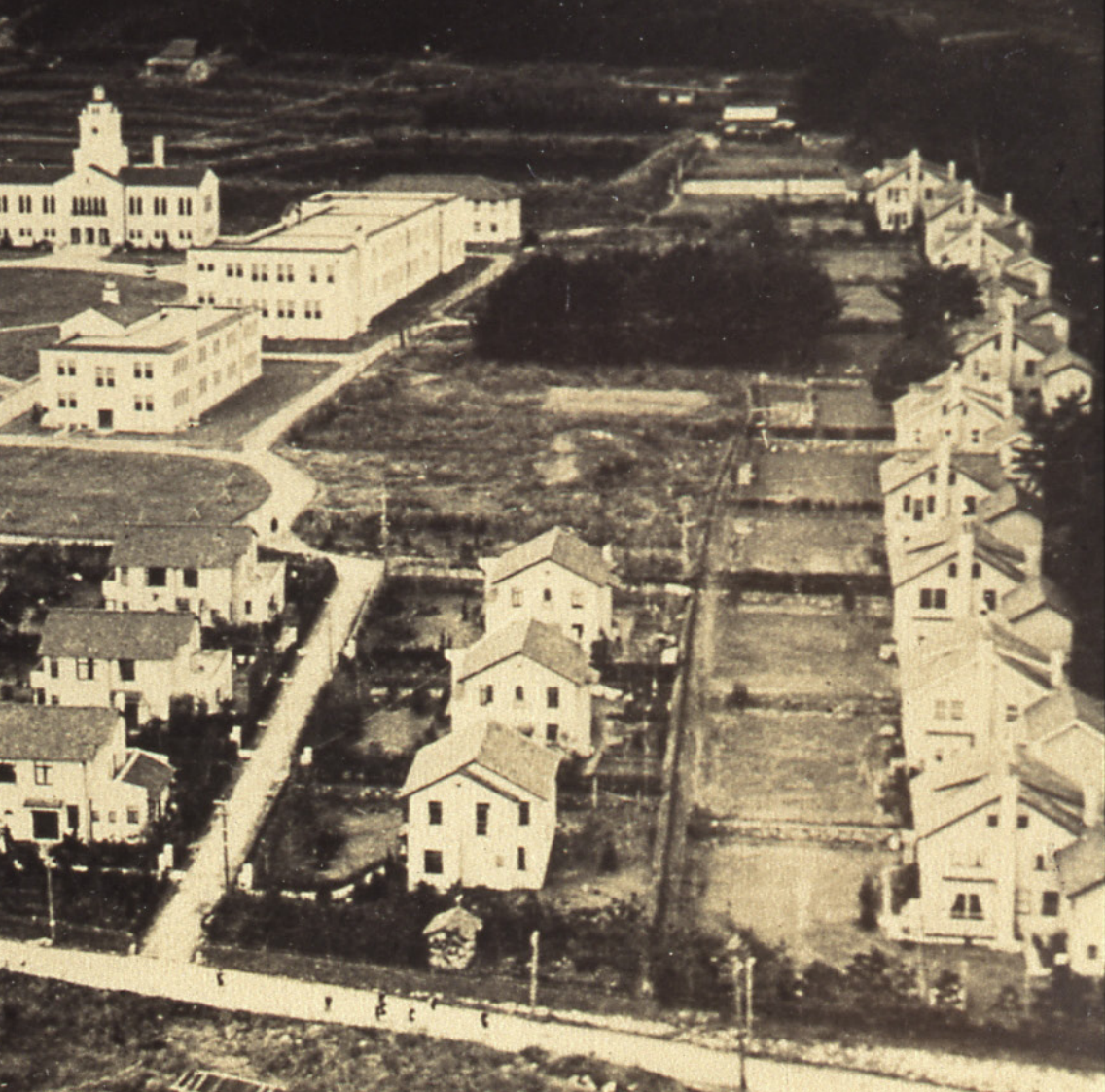


設計者 ヴォーリス のめざしたもの



「関西学院が守り育ててきたもの」 から見るキャンパスの歩み

関西学院の正門をくぐったとたん、何とも言えない懐かしさがこみ上げてくるのはなぜだろう。青々とした芝生の向こうにすくくとそびえ立つ時計台、その後ろには柔らかい丸みを帯びたお椀型の甲山。確かに私たちがその青春時代を過ごした関学のあの思い出の風景がそのままに、私たちを迎えてくれている。

これは、校舎だけでなくランドスケープまで包括してデザインした、設計者ヴォーリスの祈りの空間が今なお生き続けているからであろう。

正門から甲山に向かって1本の主軸線を引き、主軸線上に、芝生広場、時計台図書館を置き、左右に配置した校舎はスパニッシュ・ミッション・スタイルで統一し、キリスト教精神を、この空間全体で感じられるように設計されている。

いつも、同じ優しく懐かしい風景が私たちを迎えてくれている、上ヶ原キャンパスを訪れる私たちにはそんな安心感がある。だが、この美しい景観や隅々まで整った環境は、当たり前前にその姿を保っている訳ではない。実に細心に整備され、保存され、手を加えられて、今のその姿がある。

変わらないものがあり、変わってきたものにもヴォーリスのめざした原型を損なわないように造り変えられてきた。今も残る当時の建物たち、少しずつ建て替えられてきた建物たちを訪ね、ヴォーリスのめざしたもの、関学の建学の精神を改めて考えてみたいと思う。

上ヶ原キャンパス整備が 日本建築学会賞(業績)受賞

「関西学院」と「日本設計」とがこれまでの上ヶ原キャンパス整備において、「伝統的キャンパスの発展的整備 関西学院・西宮上ヶ原キャンパスのトータル・デザイン」として2017年度の栄えある日本建築学会賞(業績)の部を受賞した。

関西学院と日本設計との40年にわたる協働によって、スパニッシュ・ミッション・スタイルで統一された清明なキャンパスは、学院のアイデンティティを表出しており、先進性と様式性を矛盾なく両立融和させているところが最大の特徴であると評されたことが受賞理由。

業績の部では、これまでに東京理科大の「大学とまちとの協働によるまちづくり」、名古屋大学の「キャンパスマネジメントによる創造的再生」、JR東日本の「東京駅丸の内駅舎保存・復原」などが受賞しているもので、2017年度は埼玉県入間市の「ジョンソンタウン」や大阪市の「生きた建築ミュージアム事業」などが同時に受賞している。



上ヶ原キャンパスのめざしたもの

関西学院は、1889(明治22)年、南メソヂスト監督教会の宣教師、W・R・ランバスによって、神戸・原田の地に開校。キリスト教主義の男子教育をめざし、生徒19人でスタート。小さな学園の原田の森キャンパスは、徐々に規模を拡大しながら、高等学部開設をたし、本格的キャンパス拡充を行った。1910年神学館・中央講堂等主な校舎の設計をしたのが、W・M・ヴォーリズであった。

1918年、当時の文部省は私学の大学開設を認めた。これを受けて関西学院も大学昇格をめざし、十分な広さを求めて1929(昭和4)年に原田の森から7万余坪の西宮上ヶ原にキャンパスを移転した。この移転は、阪急電鉄の小林三氏の尽力や上ヶ原の旧地主の方々の厚意があつてこそ実現し、大学昇格の条件が整った。

1929年2月に移転作業開始、5月より新校舎における新学期の授業開始。開放的な上ヶ原キャンパスを、ベーツ第4代院長が「We have no fences」と評したという。それは、大学と社会、国境という垣根を意識しない新しい社会、人間を創造する気概を意味していた。そして、親交のあつた建築家、ヴォーリスを起用し、甲山までを含む壮大なランド・スケープ・デザインにより、キリスト教主義をその基調に置

く関西学院にふさわしい景観を作り上げた。

ヴォーリスは、中央に配置された芝生と、甲山、正門を貫く軸線を基本とし、その軸線を中心に校舎を配置した。校舎はすべてスパニッシュ・ミッション・スタイルで統一し、校舎、学生寮、教員住宅などをキャンパス内に配置する全体設計を作り上げて、キャンパス・コミュニティを形成した。

この中央芝生の中心を貫く軸線は、甲山頂点を起点として時計台から中央芝生へ、そして正門。さらには甲東園に向かつて一直線に伸びている。その結果、公道を真っ直ぐに進み、正門をはいるとすぐ、中央芝生がひらけ、甲山を背にした時計台が迎えてくれる。この光景こそ聖句「われ山に向かいて目をあぐ」(詩篇第121篇1節 文語訳)そのものを体感させてくれる。

さらに、その軸線をはさんで、時計台に向かつて右手に宗教館、神学部、文学部と学院の理念形成に関わる組織の校舎を、左手に総務館、中央講堂、商経学部と社会的関心に繋がる建物を配し、それらすべてが図書館に統合され、さらに甲山を経て神の道に導かれる。

まさにキリスト教主義総合大学の理念の実現をヴォーリスはめざし、心血を注いだこのキャンパスデザインによって、成功したといえるのではないだろうか。

上ヶ原移転時の校舎群



■今も残る、当時の建物

1929年に竣工となった中央芝生の周りに配置された建物は、スペイン屋根瓦、五寸勾配の切妻屋根に、軒屋根部の低い壁（パラペット）は軒瓦葺、白い化粧しっくい（スタッコ）仕上げの外壁と共通しており、その軒の高さも25尺から30尺に統一されている。窓、出入り口の配置も同様のスパニッシュデザイン構成になっている。また階段部には、人造石、大理石が使われ、内部建具、枠は概ね木製であった。個々の建物には、固有のデザインが採用されている。（竹中工務店によって施工された。）

時計台

関学のシンボルともいべき時計台は、スパニッシュ・ミッション・スタイルの装飾性を密度高く活用し時計台の上に、アラベスク模様のドームのある鐘塔を持つ。当初は経費の問題で機械を備えられず、4年後に念願の時計が設置された。

旧図書館は、竹中藤右衛門氏の寄付により建てられ、建坪330坪、2万3千冊の蔵書を有していた。

1955年、増大する図書館サービスに応えるように、両翼増築部分が付け加えられ、さらにその背後に新館も建てられた。

1997年に新大学図書館が建てられたのを期に、この建物は、図書館としての機能を終え、現在大学博物館として活用されている。



文学部校舎

法文学部校舎として建てられた。

一部地下1階を持つ2階建てで、延べ床面積は604坪、教室、教授研究室、事務室などを備えている。将来的には中庭を持つ囲い形の校舎が予定されていたようだが、実現しなかったようだ。校舎内のチャペルの室内装飾には、スパニッシュスタイルによるデザインに加えて、ヴォーリズの独自の洋風意匠が導入されている。玄関の上部2階部分には3枚の縦長窓があり、その両脇には、壺が飾られている。

内部の、事務室・教授研究室などの配置や印象は、当時とそんなに変わっていないのではないだろうか。

経済学部校舎

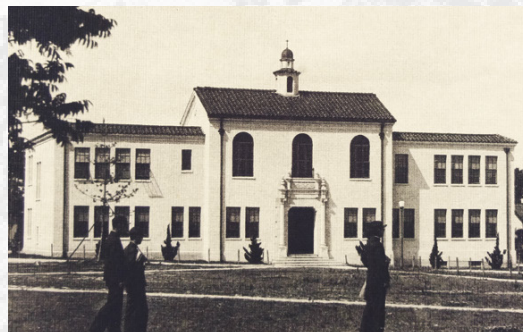
高等商業学部校舎として建てられた。

一部地下1階を持つ2階建てで、延べ床面積768坪。礼拝堂、教室、教授研究室、事務室を備えている。正面ファサードの上部には2連のアーチ型窓があり、両翼に柱飾りがある。（その装飾部分は、歴史の長さを物語るように黒ずんでいるが、色々手を施しても元には戻らないそうだ。）



中央講堂

鉄骨木造及びコンクリート造り、一部地階、中2階を有する1階建て、延べ床面積277坪。終戦後、1961年に改装が施され、1階部分の拡張、2階ギャラリー、組合事務所がおかれた。チャペルや講演会、大学院卒業式など年間を通じて利用されてきた。皆に愛されてきたこの講堂も、80年の歳月が経ち老朽化、設備の不備のため、125周年記念行事の一つとして新講堂建設が決まり、2013年2月「中央講堂感謝のつどい」を開催して、解体された。



神学部校舎

中央講堂の向かい側に位置し、屋根の中央部はやや高くデザインされ、その屋根の中央に可愛い丸い八角の塔を持つ。エントランスの両側には、円柱がデザインされている。鉄筋コンクリート作り302坪、2階建て。教員室、教室、チャペル、宗教参考品室を備えている。

変わりながらも受け継がれて来たもの

上ヶ原
キャンパス



1997年2月、時計台の背後に竣工した新図書館。明るく開放的なわが国有数の大学図書館として知られる。座席数は1700を超える。



新大学図書館

旧図書館は増築部分が屋根の片側にはみ出すような形になつており、時計台のシンメトリーを損なっていた。150万冊規模の新図書館を建てる運びとなった時に、建物の高さを15メートルに設定して、必要容積を下方へ収め、地下になる閲覧室は、オーブン地下道（サンクンガーデン）で外部に開き、明るさ開放感を確保した。屋根はスパニッシュ瓦屋根を採用して、時計台がくつきりと際立つ、元のシンメトリー景観に修復した。

この新大学図書館は、第15回日本図書館協会建築賞を受賞した。卒業生も図書カードを登録しさえすれば、誰でも利用できる。是非、一度覗いて利用してみて下さい。



創立125周年記念事業のひとつとして建て替えられた中央講堂。正面の意匠を残している。東側部分（正門側）の1階には生協店舗を収容するほか、地階は学生同士の交流の拠点、主体的な学びの場とするラーニングcommonsとなっている。



中央講堂から 新中央講堂へ

125周年事業の一環として建て替えられたが、新しい中央講堂の正面デザインは旧講堂のものを再現している。内部は、1200人を収容できるホールを持ち、オーストリアから輸入した三日月のデザインの入ったリーガ社のパイプオルガンや同時通訳のブースを備え、国際的なシンポジウムや、式典、音楽会、礼拝などに使われている。2015年9月8日の記念式典で多くの同窓生にも披露された。

旧講堂の木のベンチは、コースターやペントレイ等の関学グッズとしてリユースされた。東出入り口のエントランスホールには、千刈セミナーハウスのチャペルで使われていた、美しいデザインのステンドグラスがはめ込まれている。又、同窓生の125周年記念事業募金への協力を感謝して、ホールの座席の背面やエントランスの銘板コーナーには協力者の名前が刻まれている。



1960年に設置された社会学部の校舎(右)は、約50年を経てスパニッシュ・ミッション・スタイルの新校舎(左)に建て替えられた。旧校舎ではチャペル室が大教室と兼用であったが、新校舎では木彫り仕上げ内装の落ち着いた雰囲気チャペル専用室が設けられている。

旧社会学部から 新社会学部の建物へ

終戦より2年後、新制学部への転換により、学部、学生の増加が急激に進み、新築・増築を余儀なくされた。この時期に建てられた建築物の多くは、機能主義的モダニズムの傾向に沿うもので、継承よりは新しいデザインの導入が図られ、1960年代に建てられた社会学部・理学部などはモダニズムデザインで建てられた。中央図書館の裏手に立つ社会学部の建物は、機能性には優れていたが、スパニッシュ・ミッション・スタイルの文学部の建物とは、かなり異質な感じがあった。年月を経て建て替えの時期に当たり、再びヴォーリスの空間、スパニッシュ・ミッション・スタイルの校舎に建て替えられ、統一感のあるキャンパスがよみがえった。

新校舎には、チャペルが新設され、共同学習室や劇場型の大教室も設けられ、学生の学習意欲の向上に配慮した空間を多く設けている。

上ヶ原キャンパスでは、新築であれ、建て替えであれ、

関学キャンパスの設計者



William Merrell Vories

ウィリアム・メル・ヴォーリス

ウィリアム・メル・ヴォーリスは、1880年アメリカ・カンザス州で生まれた。コロラド・カレッジを卒業し、1905年滋賀県近江の商業高校の英語教師として来日した。2年後に解職されて一時帰国した

のち、再び近江の地に戻った。人懐っこい性格で、ユニークなキリスト教伝道のかたわら、建築設計の仕事 시작했다。彼は、建築家としてだけでなく実業家(近江兄弟社メンターム)としても活躍した。1919年、日本人女性一柳満喜子(ひとつやなぎ・まきこ、神戸女学院OG)と結婚。1941年戦時下に国籍を変え、日本人一柳米来留(メル)となる。

終戦後は、二つの母国の架け橋となって積極的な働きをした。1964年、83歳の生涯を終えるまで、近江八幡市にとどまりキリスト教伝道と社会教育、医療、学校教育などの事業を続けた。

彼が生涯貫いてきた生き方や設計理念は、クリスチャン・ヒューマンイズムであり、近江の地や日本をこよなく愛した人物であった。

改築であれ、近年多くの建築物が誕生している。その間に、神戸三田キャンパスが開設され(1995年)、宝塚に初等部を設置(2008年)、聖和大学との法人合併、教育学部設置(2009年)と学院の発展は目覚ましいものがあつたが、すべてスパニッシュ・ミッション・スタイルに統一されている。

どこにあつても、どの時代にあつても、守り伝えたい“Mastery for Service”の精神を、ヴォーリスは見事に具現してくれた。このキャンパスをこれからも維持・管理・発展させていくことが、学院、同窓の使命のひとつとなつていであらう。

この特集にあたり改めて、キャンパスや建物を見直してみた。どこに一番キリスト教精神を感じることができのたろう。キャンパスの美しさに惹かれて入学を決意した私にとって、実の所、キリスト教精神は少し、いや、かなり縁遠い存在であつた。そんな私でも、正門に立つて時計台越しに甲山を見上げると、敬虔な思いに打たれ、暖かいものと未来へ向かうという気持ち湧き上がってくる。ヴォーリスさん、やっぱりあなたは偉い!と思う。

私が関学から頂いた大切なもの、真つ直ぐに見上げること、下や横を見るのではなく、いつの時も少し上を向いて前へ歩いて行くこと。これがあるから、この年まで楽しく生きてこれたし、やっぱり、関学好きやねん!

編集委員 塚本恵美子(S43文)

上ヶ原キャンパスが 語りかけるもの

ヴォーリスキャンパスの「発展的整備」



関西学院院長 田淵 結

2017年5月30日、日本建築学会賞授賞式が東京で行われ、学校法人関西学院・株式会社日本設計及び内藤徹男氏（元日本設計代表取締役）が「伝統的キャンパスの発展的整備―関西学院・西宮上ヶ原キャンパスのトータル・デザイン」により業績部門で表彰されました。日本建築学会は日本の建築界において指導的役割を果たしている国内最大の学会であり、その学会賞は多方面から高い注目と評価を集めています。

今回の受賞のポイントは「伝統的キャンパスの発展的整備」というところにあります。最近私も「関西学院とヴォーリス」〔関西学院史紀要第23号〕のなかで触れていたところですが、「関西学院といえば」という問いに、多くの同窓の方々は上ヶ原キャンパスの時計台を中心とする中央芝生の光景を思い浮かべられることでしょう。創立125周年記念式典の統一イメージもそうでした（ランパス先生による創立時代の原田校地の光景などは全く用いられませんでした）。それだけ中々時計台が定着しています。この上ヶ原キャンパスの誕生は1929年、3年後に大学開設を目指しての新キャンパスのスタートでした。それから88年、現在上ヶ原キャンパスに通学する学生・生徒数は移転時の7倍以上となっています。それだけの校舎の増築、キャンパスの整備が精力的に行われてきたのですが、それでも上ヶ原キャンパスのイメージは創立当時とあまり変わっていませんし、多くの同窓先輩方が今も上ヶ原キャンパス

を訪れて、それぞれの時代の思い出を懐かしく振り返っておられます。そこに「伝統的発展的整備」があるのです。

ヴォーリスによる上ヶ原キャンパス設計は聖書詩篇121篇1節の「私は山に向かつて目を上げる」（口語訳）にもとづく、正門（真ん中）、中央芝生（中央線）、時計台（尖塔）、甲山（三角点）を一直線で貫く「軸線」でした。その軸線を挟んで右手が宗教センター、神学部、文学部という理念系の建築物が、左手は学院本部、商学部、経済学部という社会の現実と直接関係する建物が、左右近似対称の形で建てられ、正面には知の総合としての図書館が位置し、全体のキャンパスデザインが、（カリフォルニア）スパニッシュ・ミッショんで統一されていました。その全体的イメージは今もまったく変わりなく上ヶ原キャンパスの特色であり続けています。でも実は、中央芝生をめぐる建物は徐々に変化してきているのです。

何よりも創立125周年を記念して建て替えられた中央講堂、1929年の中央講堂の写真と比較すると建物正面は古い講堂の約1.5倍の大きさとなっていますし、内装や機能などは一新されています。それほど大きな建物ではないにしても、正門入ってすぐの車寄せのある法人本部棟もかなり拡大されていますし、その真向いのランパス記念礼拝堂に隣接する吉岡記念館は、かつての宗教センターがほぼ平屋建であったものが2階、一部3階建となっています。何よりも大きな変化であったのは時計台の景観

なのです。つまり時計台の背後に新大学図書館を建設し、従来の何倍もの蔵書を誇り、基本的に全面開架式を原則とする地下2フロア、地上3階の大きな図書館が建てられたのです。ところが、それだけ個々の建物が大きく建て替えられたにも関わらず、上ヶ原キャンパスのイメージはほとんど変わっていません。同窓のみならず、「関学は変わらへん」という思いを持っているだけではないとしたら、それが「発展的整備」なのです。

関西学院上ヶ原キャンパスの基本設計者ヴォーリスは1964年にその生涯を閉じています。関西学院上ヶ原のランパス記念礼拝堂は彼の最後の作品のひとつですが、ヴォーリス以後関西学院の建築はヴォーリス設計事務所からやがて学院の創立100周年を迎える頃、日本設計に引き継がれていきます。その指導をされたのが内藤徹男氏で、内藤氏はヴォーリスが上ヶ原キャンパスに込めた設計理念のために、スパニッシュ・ミッションの源流となるカリフォルニアを踏査され、また軸線構造などへの深い研究をされた上で、それ以後の建物、主要なものを挙げれば新学生会館、A号館からはじまる大学講義棟、高中部校舎・礼拝堂などを設計され、そのデザインは神戸三田キャンパス、西宮聖和キャンパス、宝塚の初等部にも用いられています。今回は上ヶ原キャンパスのみが審査対象でしたが、本来は現在の関西学院に共通する建物のイメージを対象とされてもよかったのでは、とさえ思えます。